

特集 日本海振興と留萌地域活性化に向けた 5つの「核・拠点形成」づくり シリーズ2

民間企業等と連携した「①アウトドア観光の拠点」「②未来志向型教育の拠点」「③食料安全保障の拠点」「④再生可能エネルギーの拠点」「⑤食品製造の拠点」といった5つの核・拠点形成づくりによる新しい産業の創出と雇用・関係人口増に向けてチャレンジし、本市の持続的な発展を目指します。8月号では、「③食料安全保障の拠点」について掲載します。

問 市・農林水産課 TEL 42-1837

3 食料安全保障の拠点づくり【小麦倉庫】

■背景

- ①国際情勢の変化や自然災害などを背景に、食料安定供給リスクの高まり
- ②太平洋側の港に集中する物流機能の平準化により想定されている千島・日本海沖地震などの大規模災害時のリスク分散
- ③トラック輸送の大型化、働き方改革における労働時間規制への対応
- ④現留萌港小麦集出荷施設の老朽化（昭和42年建設）



食料安全保障を踏まえた留萌港背後圏域（上川・北空知・留萌地区）
における農産物の保管・流通機能の拠点形成



留萌港小麦集出荷保管施設（小麦サイロ）整備事業

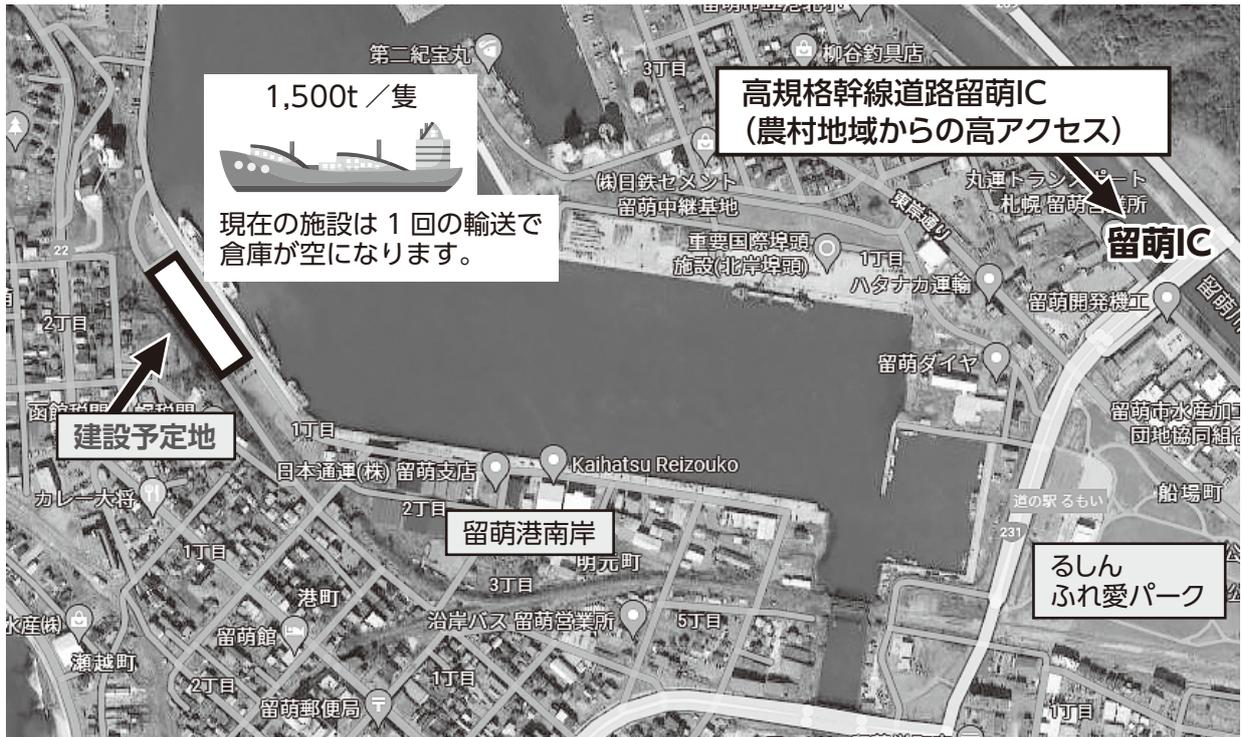
道産小麦の安定的な国内流通体制の確保と、品質保持を図るための集出荷保管施設の整備（500tサイロ×6本=3,000t貯蔵。荷受、船積、付帯施設）

年間取扱数量 1.5万t (R3) → 年間 3.6万t

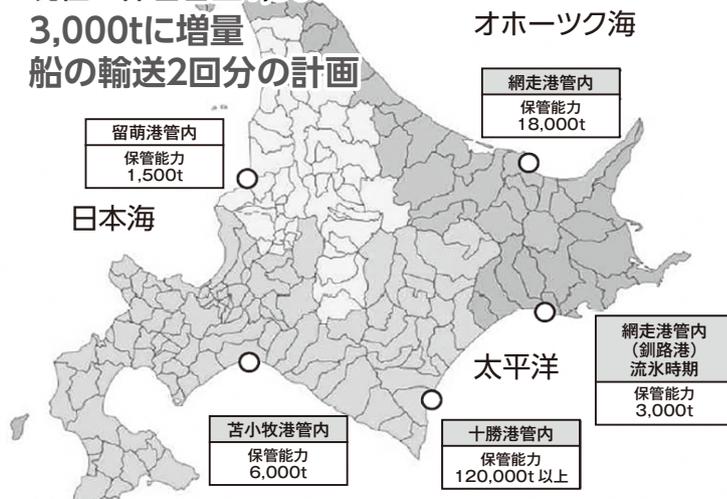
■効果

- ・留萌港に農産物の出荷拠点を整備することで輸送業務や荷役業務が安定的に確保され、雇用の確保と留萌港の活性化が図られます。
- ・留萌管内をはじめ、近隣産地の農産物の安定流通体制が確保され、需要に応じた生産体制の強化による生産振興が図られます。
- ・高規格道路を活用した物流ネットワークの構築により、輸送道路の強靱化対策に向けた整備が期待できます。

建設予定地



現在の保管容量1,500tから
3,000tに増量
船の輸送2回分の計画



道産小麦は、道内5か所の港から輸送されており、日本海側は「留萌港」だけです。

小麦まめ知識

- ・小麦の8～9割は外国から輸入
- ・小麦の自給率(カロリーベース)は15%ほど
- ・国産小麦の6割強は北海道産小麦
- ・道産小麦の8割程は本州の製粉会社などへ出荷
- ・国は小麦の増産を推進
- ・食料の安定供給に関するリスク検証(2022)で輸入小麦は「重要なリスク」に評価
- ・国産小麦の安定供給が重要

食料の安全保障、物流の合理化を図る拠点として

留萌港から北海道産小麦を安定して搬出することは、国産小麦の流通・消費体制において重要な役割を担っています。

現状は取扱数量が少ないため、影響が小さいと思われていますが、今後、輸送コストの更なる増大が想定されており、製粉会社や小麦の生産者などへの影響が心配されています。

小麦の増産は、国の食料安全保障施策として進められていることから、留萌市ではJAるもいなどの関係機関と留萌港の特質性や、過剰投資にならずにかつ、安定的に産地からの輸送や保管、船積みができる施設の内容について意見交換を行っています。

また、活用可能な国の補助メニューを洗い出し、初期投資の負担を軽減した上での事業化に向けて準備を進めています。